特別座談会

失敗しない

中高一貫校生の学習法とは①

「共に学ぶ環境」でこそ 一人ひとりの最適な学びを引き出せる

新型コロナの影響で、教育の世界は大きな打撃を受けました。その反面、オンライン授業という新しい教育スタイルが生まれ、学びの可能性が広がったのも事実です。新中1生は、こうした新しい教育環境のなかに置かれることになり、学習塾も変わりつつあります。駿台中学部・高校部の校舎長や、講師の方々にお集まりいただき、新しい時代の塾での学びについて語り合っていただきました。

大学受験コース 統括
堀口 一義さん

対面でもオンラインでも「生徒をしっかり見る」が基本

堀口 新型コロナの感染が広がった昨年初頭、真っ先に考えたのは、生徒の学習機会を奪ってはならないということでした。塾に来ることができなければ、単純に勉強量が減り、その年の学年の単元が未定着になってしまう。そこで駿台中学部では急遽オンラインのシステムをつくり対応してきましたが、現在は、どんな状況でしょうか。

村田 お茶の水校は都心に立地しているため、感染への懸念からオンライン授業を選ぶ生徒が多く、全体で5～6割、クラスによっては6～7割がオンライン授業になっています。

梅木 横浜校も同様で、人数が多いクラスでも出席者が5～6人のときがあります。もともと感染症対策として始まったオンライン授業ですが、最近では学校のテスト前になると、オンライン授業に切り換える生徒がいるなど、利用の仕方が変わってきた印象があります。

村田 当日になってオンラインでという連絡もよく来ます。オンライン授業が選択肢として定着し、生徒の多様なニーズに応えられているという実感を持っています。

堀口 校舎職員としては、生徒に全く会えない状況に直面し、生徒との対面でのコミュニケーションの重要性を再認識しました。

梅木 私たちは、登校時の「こんにちは」というあいさつから、その生徒の様子全体に目を配っています。学園祭の時期なら、どんなことをやっているのか尋ねるとか、歩き方に元気の無さを感じたら、何か声掛けしてみるとか、そういう関わりをとても大切にしています。こうした大事な部分は、オンラインの面談等も交えて維持しています。

村田 人が介入しないと、しっかり勉強しているかどうかわかりませんからね。駿台の良さは先生や教務がしっかり生徒を見ているところです。対面でも、オンラインでも、同時に生徒を見守っていくことが大事ですね。

対話で分かる一人ひとりの理解度

堀口 最初は動画配信だけでしたが、すぐに配信教材で学んでから、リアルタイムで配信するオンライン授業でフォローするシステムを整えました。対面授業の良さをできるだけ失わないようにするには、この方法がベストだと考えたからです。現在は、対面かオンラインかを選べる形にしていますが、先生方にとっても、生徒の顔が見える方がいいわけですよね。

横浜校 校舎長
梅木 直人さん

西村 その通りです。画面の向こうにいたとしても、対話は絶対必要だと思っています。とくに自己管理がなかなかできない中学生のうちは刺激も必要ですから、積極的に話しかけるようにしています。

福原 緊急事態宣言が出されていたときは、生徒が誰もいない状態でカメラ相手でしたから、やりにくかったですね。しかし、対面授業が再開されてからは、オンラインでも先生の授業がよかった!!と言ってもらえたときは、すこしホッとしました。

堀口 当初は3ヶ月間も勉強しなかったらどうなることかと思いましたが、駿台の生徒はやはり皆まじめに、動画授業もオンラインでの特別授業も参加してくれたのが本当によかったですね。

西村 ただ、オンライン授業は、教室での対面とちがって、理解度の担保が困難です。たとえば10問の答案なら、対面であればパッと見て何が理解できていないかすぐにわかります。30人いても全員の答案を見て回ることができますが、オンラインだとそれができません。単問ごとに指していくことはできますが、クラス全体の理解度を把握するのに時間がかかるのは、やや難点です。

堀口 仮に全員の手元がばっちり見える機能が今後誕生したとすればいかがですか。

西村 それは欲しいですね。もう1台カメラをおいて、手元を映すことができないかと提案したくらいですから。実現すればかなり対面に近い感覚で授業ができそうです。

福原 生徒の方は対面授業よりはるかに緊張するでしょうね(笑)。

お茶の水校 校舎長
村田 洋輔さん

生徒自身が「当事者感覚」を持てるか

堀口 オンライン授業が一般的になったことで、塾として変えてはいけない部分、大切にしたいことなどが明らかになってきたと思いますが、いかがでしょう。

福原 今も授業に来る生徒がいるということは、実際に対面で授業を受けた方が分かりやすいということを、感じてくれているからだろうと思います。こちらとしてもうなずく生徒の顔をその場で見たいというのもありますから、対面で受けてくれる生徒の存在は我々にとってもモチベーションが高まる面もありますね。

西村 先ほどと矛盾するようですが、授業に参加している当事者感覚というものは絶対に必要です。オンラインでの授業だと、テレビを見ているような感覚で受けているのではないかと感じることがありますから。オンラインの世界なりの空気感はあるとは思いますが、教室の熱気や空気感を他の生徒と共有できないことが、モチベーションを維持する難しさにつながってしまう生徒もいるかもしれません。

英語科講師
西村 卓さん

質を維持しながら駿台の教育を全国に

堀口 今後、デジタルネイティブとか、Z世代と呼ばれるような新しい世代の生徒が続々入ってきますから、そういう生徒の可能性を引き出す学び方や学習環境、学習サービスなども追求していく必要はありますね。

梅木 必要に迫られたオンライン化でしたが、学校行事や部活などで出席できない場合も、首都圏にある駿台中学部の校舎であれば、どこでも振り替えて学ぶことができるようにしたため、授業を全く受けない状況は減少しました。全国規模でのオンラインシステムが構築できれば、外出できない生徒や、勉強したいのに塾が近くにない生徒への大きな福音になるのではないかと思います。

村田 教育の機会均等は大きなテーマであり、駿台の授業を受けたいという人も多いと思いますから、遠方で駿台の校舎に通えないという生徒にも教育が届けられるメリットがあります。なお、来年からは授業の録画が始まり、見返すことができるようになりますから、繰り返し復習することで学習効果を高めることにも役立つと思います。

西村 オンラインでは、人数は制限すべきだろうと思っています。機能的には何百人でもできますが、成績や理解度の担保という点では、40人が限度だろうと思っています。今後、技術が発展して、正答率のようなものを講師が瞬時に把握できるようなシステムになれば、かなり教育効果は上がると思います。

福原 数学では、類題を扱うことが解き方の発想に至るプロセスを学ぶことにつながります。オンライン授業や録画をうまく利用して、時間的な余裕ができ、そうしたプロセスを学ぶ授業をプラスα的に開講できれば、より充実した学びを実現できると思います。

堀口 今、教育現場は、オンラインも対面も様々な形に発展してきています。我々も駿台に通ってくれる生徒が全員、効率よく学習しつつ、モチベーションが失われない環境を目指していきたいと思います。そのためには、人と人との交流を大切にしながら、一人ひとりの最適な学び方を引き出せるような教育方法を模索し続け、アプリ開発などで高品質な教育への門戸を大きく広げていきたいと考えています。

本日はありがとうございました。

数学科講師
福原 俊弘さん